

あと何回花見ができるだろうか

斉藤 征雄

五年前『さくら』という題で800字文学館のエッセイを書いた。新宿御苑から代々木公園の桜を見た後家路をたどった印象を綴った文章で、最後を次のように締めくくっている。

途中、ある庭にひっそりと咲く枯れかけたような桜の老木が目に入った。空き家なのか荒れ果てた庭の中でつる草に絡まれていたが、まばらながらもきちつと花をつけている。「今年も咲きましたよ」としゃがれた声で囁いているような気がした。

ふと、あと何回花見ができるだろうか、わが身のことに思いが及んだら、この老木がいとおしく感じられた。

今年も桜が満開を迎えた。

すっかり忘れていたあの時の老木はどうなっているだろうかと思ひ、行ってみた。しかし、たしかこの辺と思うところにはその庭も老木も跡かたもなかった。そこには、新しい瀟洒な住宅が建っていて、ちょうど若い母親が子供を抱いて玄関から出てくるくらいだった。

時の流れとともに人も街も老いて往き、生まれかわる。そして、形あるものは壊れ命あるものは滅して新しいものが芽吹くのだ。生者必滅ということか。我が存在も、いずれあの老木のように跡かたもなく消えてゆく運命にある。

あの時、あの老木は明確にそのことを自覚していたに違いない。だからあのよう毅然とした姿で咲くことができたのだと思う。

あれから五年がたち、今年まもなく喜寿を迎える。喜寿に如何ほどの意味があるかは知らないが、ここまで生きたという証には違いない。道標のようなものだろう。振り返れば、かりそめにも毅然とした人生を歩んだとは言えないので、せめて最後は見た目だけでもあの老木のように背筋をしゃんと伸ばそう、と思った。

五年後、このエッセイを読み返す自分が存在しているかどうかはわからない。そのことをしっかりと自覚して、それを泰然と受け止める覚悟ができていなければ、あの老木のように生きられない。

満開の桜の花吹雪を見ながら、あと何回花見ができるだろうか、と考える。